

使役構文について

—— 移動を表す動詞の場合 ——

木 内 良 行

本稿は、木内(1988)に続き、使役構文に関連して、前置詞なしの不定詞を補語にとる構文について論じるものである。今回は、主動詞が運動を表す動詞(以下、Vmt (verbe de mouvement) と略記)、特に移動を表す動詞の場合をとりあげる。Vmt が自動詞か他動詞で、大別して、次の二つのタイプの構文が考えられる。

(I) NP₁ Vmt Vinfinitif

(Vmt : aller, s'en aller, arriver, courir, descendre, entrer, monter, partir, passer, rester, retourner, sortir, venir, ...)

(II) NP₁ Vmt NP₂ Vinfinitif

(Vmt : amener, conduire, emmener, envoyer, mener, traîner ...)

(II) での Vmt は運動使役動詞とも呼ばれるもので、一部の動詞については、上の構文以外に、

(III) NP₁ Vmt Vinfinitif {à}/par} ...

の形の構文もまたとることができる。以下では、(II)、(III)の構文が、前回に見た voir, entendre, sentir といった知覚動詞を主動詞とする構文と同じ構造を持つことを示していくが、あわせて、(I)の構文が(II)のそれと隣接した関係にあることも明らかにする。まず、(I)、(II)の構文の特性から検討してみることにしよう。

1. (I), (II) の構造について

二つの構文の具体例をまずあげておく⁽¹⁾。

(I) NP₁ Vmt Vinfinitif

- (1) Il s'en va acheter des billets.
- (2) Il court chercher la voiture.
- (3) Il est passé prendre des nouvelles.

(1) 以下の例文は、Gross, Lamiroy, Melis, Réquédât, Sandfeld に拠るものが多いが、重なって出てくる例文も少なくないので、出典については特にことわらないことにする。

- (4) Elle est sortie prendre l'air.
 (II) NP₁ Vmt NP₂ Vinfinitif
 (5) Je l'ai amené boire un verre à la maison.
 (6) J'ai conduit Jean chercher son frère.
 (7) Le bureau envoie Marie commencer à travailler à Vitry.
 (8) Il m'a traîné voir une pièce idiote.

まず、二つの構文で、主動詞と不定詞の間に何等かの境界があることは、不定詞の補語が接辞になっても主動詞の左の位置まで移動できないことより明らかである。

- (9) Luc est monté acheter le billet.
 (10) Luc est monté l'acheter.
 (11) *Luc l'est monté acheter.
 (12) J'ai conduit Jean chercher son frère.
 (13) J'ai conduit Jean le chercher.
 (14) *Je l'ai conduit Jean chercher.

また、(II) について、NP₂ は不定詞の意味上の主語を示してはいるが、少なくとも表層では主動詞の直接目的語として機能していることより、

- (15) Je l'ai conduit chercher son frère. (← (12))

それぞれの構文は表層で次の構造を持っていると考えられる。

- (16) NP₁ Vmt [PRO V ...] (I)
 (17) NP₁ Vmt NP₂ [PRO V ...] (II)

また、(II) で、その意味上の関係にもかかわらず、NP₂ が主語として実現される構文は存在しないことから、

- (18) *NP₁ {amener/conduire/emmener/envoyer/...} que NP₂ V ...

それぞれの構文が基底構造ですでに (16), (17) の形をしていると考えるのが妥当であろう。ただ、(I) での NP₁ の Vmt に対する意味役割は、(II) における NP₂ と同様、Agent ではなく Thème であるから、反対格仮説に従うならば、その基底構造は次のようになり、

- (19) ϕ Vmt NP₁ [PRO V ...] \Leftrightarrow (I)
 (20) NP₁ Vmt NP₂ [PRO V ...] \Leftrightarrow (II)

(I) と (II) とは極めて類似した構造を持つことにもなる。確かに、表層で、(I) では不定詞の意味上の主語が主動詞の主語と同一であるのに対して、(II) ではそれが主動詞の直接目的語になるという違いがありはするが、いずれの場合も、不定詞で表される行為の主が、同時に Vmt で表現される移動の主であることには変わりはない。従って、移動の主を示す名詞句と、それがコントロールする不定詞に、(I) と (II) に共通の性格が出てくることが予想されるが、実際、次のように両構文に共通した幾つかの制約が観察される。

2. (I), (II) の構文の制約について

両構文に共通した制約には、例えば次のようなものがある。

—不定詞は具体的な行為を表すものでなければならない。例えば、状態を表す動詞は使うことが出来ない。

(21) Jean retourne acheter ce livre.

(22) *Jean retourne avoir ce livre.

(23) Il a envoyé Pierre procurer le résultat de l'examen.

(24) *Il a envoyé Pierre posséder le résultat de l'examen.

—不定詞が否定形になることはない。

(25) Pierre est monté voir Marie.

(26) *Pierre est monté ne pas voir Marie.

(27) Jean envoie Marie parler au directeur.

(28) *Jean envoie Marie ne pas parler au directeur.

—不定詞は受け身形にならない。

(29) *Luc a envoyé Pierre être engagé par le directeur.

(30) *Jean est descendu être payé par Marie.

—不定詞は法助動詞と共に用いられない。

(31) *Luc est monté {pouvoir/devoir} terminer son travail.

(32) *Le bureau envoie Paul {pouvoir/devoir} travailler à Paris.

—不定詞は複合時制形をとらない。

(33) *Pierre envoie Marie avoir terminé le travail avant trois heures.

(34) *Il est rentré avoir fini son devoir avant le dîner.

これらの制約が何故起こるのかということが、当然、問題となる。以下では、不定詞が構文内で演じる意味役割という観点から、その理由を探ってみることにしよう。これらの制約のうち、特に受け身や複合時制をとらないということを含めて、不定詞が一般に助動詞をとらないことを、不定詞句の補文構造の欠如という、純粹に統語構造のレベルで説明しようとする試みもあるが⁽²⁾、ここではその方法は採用しない。その理由は次に述べるとおりである。

(2) 例えば、(I) の構文に関して、小川 (1988) では、GB理論の枠組みで、不定詞を核とした動詞句に補文構造を仮定せず、単なるVP とすることによって、それらの制約を説明しようとする。しかし、この理論は後述するように一般性に欠けているし、何故に不定詞に状態動詞をとらないかということも説明することが出来ない。

3. 不定詞の意味役割 — 知覚動詞による構文の場合

上のような制約が見られるのは、実は、主動詞が移動を表す場合に限られることではない。知覚動詞を主動詞として(Ⅱ)と同様の形をとる文の不定詞にも、やはり、同じような制約のあることが観察される。まず、その場合を検討してみることにしよう。

- (35) J'ai vu Paul chanter une chanson.
 (36) *J'ai vu Paul ne pas chanter de chanson.
 (37) *J'ai vu Paul avoir chanté une chanson.
 (38) *J'ai vu Paul pouvoir chanter une chanson.
 (39) ?J'ai vu Paul être giflé par Jeanne.

知覚動詞が移動の動詞と大きく異なる点は、不定詞のかわりに疑似関係節を置くことができることであるが、その場合にも、やはり同様の制約が現れる。

- (40) Je l'ai vu qui chantait une chanson.
 (41) *Je l'ai vu qui ne chantait pas de chanson.
 (42) *Je l'ai vu qui avait chanté une chanson.
 (43) *Je l'ai vu qui pouvait chanter une chanson.
 (44) *Je l'ai vu qui était giflé par Jeanne.

この例を見れば、その制約が、不定詞が補文構造を持つか持たないかなどという、統語構造上の問題のみに還元できる性質のものでないことは明らかであろう。疑似関係節が補文構造を持たないとは考えられないからである。むしろ、ここでは、その構文の持つ意味特性に注目すべきであり、実際、次のように考えることができる。voir, entendreなどの知覚動詞が次のような二種の構文をとり、

- A : NP₁ V₁ NP₂ V₂ ... (又は, NP₁ V₁ NP₂ qui V₂ ...)
 B : NP₁ V₁ V₂ NP₂ ... (又は, NP₁ V₁ que NP₂ V₂ ...)

知覚の経験を直接に述べる場合(A)と、知覚の経験をもとにした判断を述べる場合(B)とで、構文と意味にはっきりとした分化が見られることは、既に、木内(1988)に見たとおりである。上の例はすべてAのタイプの構文だから、当然、知覚の直接の経験が述べられなければならないが、その場合、誰かが何かを行うという知覚されるべき対象は、当然、直接に知覚可能なものでなければならず、従って、既に完了してしまった行為や、目の前に存在しない行為はその対象とはならないはずである。とすると、上の例で、不定詞が否定や完了形をとることができず、法助動詞といっしょになって行為の単なる可能性を示したりすることがないのも当然の帰結ということになる⁽³⁾。受け身形が現れにくいことについては、次のようにse faireを使うと、文が可能になることからすると、

- (45) *?J'ai vu Paul être giflé par Jeanne.

(3) "J'ai vu que ..." の形の構文だと、これらはすべて可能な文となる。

(46) J'ai vu Paul se faire gifler par Jeanne.

動詞の態そのものよりも、“être + 過去分詞”で一過性の出来事を表すときに現れる完了アスペクトが原因していると考えられる。

4. 不定詞の意味役割 — 移動動詞による構文の場合

移動動詞による (I), (II) の構文の場合も、知覚動詞による構文と同じことが起こっていると筆者は考える。まず、(I), (II) における移動動詞は、実際に物理的な移動があることを示すものでなければならない。例えば、*amener*, *conduire*, *mener* などには物理的な移動があることを示す場合と、何かをするように誰かを仕向けるという心理的な意味で使われる場合があるが、(II) の構文が使われるのは前者の場合に限られる（後者の場合は、不定詞の前に前置詞 “à” を置かなければならない⁽⁴⁾）。

(47) **Qu'est-ce qui vous a amené choisir ce métier?*

(48) *Qu'est-ce qui vous a amené à choisir ce métier?*

(49) **Cela conduit Jean fuir Marie.*

(50) *Cela conduit Jean à fuir Marie.*

そして、不定詞は、主動詞で表現される移動があった時点で具体的に実現されるべき行為を表すことを前提としているのではないかということである⁽⁵⁾。そうすれば、語彙上の制約として、不定詞は状態動詞ではなく具体的な行為を表すものでなければならないこと、また、次の例に見られるように、移動主はその行為を実現させるだけの資格（例えば、有生であること）を備えたものでなければならないということをも合わせて説明出来るよう

(4) この場合には上記の制約がかなり緩くなるとして、Melis では次のような例があげられている。

Cela mène Pierre à être condamné de tous.

Cela mène Pierre à ne plus vouloir céder.

(5) Melis にも同様な意見が述べられており、それらの制約が絶対的なものではないとして、まず、否定辞が動詞と一体となって肯定的な意味を持ちさえすれば文として成り立ち得る例として次の文、

?*Jean envoie Marie ne pas céder à Jules.*

(*ne pas céder* : résister)

そして、受け身形も、稀ではあるが、可能な場合があるとして次のような文をあげている。

?*On enverra le Masque de Fer être enterré vivant à Pignerol.*

?*Le Premier Ministre enverra ce secrétaire être attaqué par la Chambre.*

しかし、これらの文の許容度はやはりあまり高くはないようである。

になる。

(51) Pierre envoie Gérard amuser Marie.

(52) *Pierre envoie la chaise amuser Marie.

また、それらの構文で、不定詞が位格としての性格を備えており、前置詞 *à* をとらないにもかかわらず、疑問詞 *où* を受けたり、副詞 *y* で置き換えられたりする場合があることがよく指摘されるが、

(53) — Où court-il?

— Voir Anne.

(54) — Où veux-tu aller?

— Faire le tour des remparts.

(55) — Où Paul envoie-t-il Pierre?

— Voir Marie.

(56) “La nuit porte conseil ... allons nous coucher”. Et il y allait au grand soulagement de sa femme.

(57) — Quand me conduiras-tu ramasser des fraises des bois?

— Je t’y conduirai ce midi même.

これは、不定詞で示される行為の実現が、主動詞で表される移動の到達点と一致することを反映するものであろう。なお、知覚動詞の場合と同じく、不定詞が受け身形のかわりに“*se faire* 不定詞”の形をとれば、文が可能となるが、

(58) *Jean est descendu être payé par Pierre.

(59) Jean est descendu se faire payer par Pierre.

(60) *Jean a envoyé être engagé par le directeur.

(61) Jean a envoyé se faire engager par le directeur.

これも、やはり、受け身形の完了アスペクトの影響と考えられる。

なお、補文の文法関係については、前回の議論と同様、とりあえず、補文に斜格が与えられるということにしておこう。ただし、名詞句と補文の分布はかなりの違いがあるのだから、それを示すための何等かの装置は必要であろうし、特に移動動詞の場合、(I)、(II)の構文と、(48)のように前置詞が不定詞の前に現れる構文を構造上どのように区別できるかということも未解決のままである。これらの問題の解決は今後の課題として残されている。

5. (III)の構文について

最後に運動使役動詞によるもう一つの構文について見てみよう。不定詞の意味上の主語が、ここでは、“(à) NP”あるいは、“par NP”の形で、不定詞の後ろに現れる。

(III) NP₁ Vmt Vinfinitif {(à)/par} NP₂ ...

- (62) Pierre mène danser Marie.
 (63) Pierre mène paître les brebis dans les Alpes.
 (64) J'enverrai lire ce rapport au directeur.
 (65) J'enverrai chercher cette lettre par la secrétaire.

“faire + 不定詞”による使役構文との類似性から、ここでも文融合が起こっていると予想される⁽⁶⁾。実際、次に見るように(64)、(65)で、不定詞の直接目的語が接辞代名詞になると、それが現れるのは主動詞の左の位置であり、(II)の構文とは違って、不定詞の直前にそれを置くことはできない。

- (66) Je l'enverrai lire au directeur.
 (67) *J'enverrai le lire au directeur.
 (le : le rapport)
 (68) Je l'enverrai chercher par la secrétaire.
 (69) *J'enverrai la chercher par la secrétaire.
 (la : la lettre)

これは、明らかに、表層で補文境界が消えてしまっていることを示すものであり、一般の使役構文の場合と同様、(64)、(65)には次のような基底構造を仮定することができるだろう。

- (70) J'enverrai lire ce rapport au directeur.
 ⇐ j'enverrai [PRO lire ce rapport] au directeur
 (71) J'enverrai chercher cette lettre par la secrétaire.
 ⇐ j'enverrai [∅ chercher cette lettre par la secrétaire]

ただし、Le Goffic & McBrideに指摘されているとおり、この形の構文をとることができる運動使役動詞は、emmener, envoyer, menerなど、ごく少数に限られている。

- (72) *Je conduit lire ce rapport au directeur.
 (73) *Je conduit chercher la lettre par la secrétaire.

その理由は明らかではない。ただ、運動使役動詞で文融合によると考えられる構文の使用頻度は非常に低く、(70)や(71)のような文でさえ、それを不自然だと感じるフランス人は少なくない。また、特にenvoyerの場合であるが、熟語的用法の中で使用されることが多いようである⁽⁷⁾。

(6) 文融合の定義など詳細については、木内(1987, 1988)を参照されたい。

(7) Melisによれば、次のように意味よる使い分けが見られるという。

- Il a envoyé promener Pierre.
 (= il s'est débarrassé de Pierre)
 Il a envoyé Pierre promener.
 (= il a envoyé Pierre en promenade)

(74) Il a envoyé {paître/promener/valser} Pierre.

(= il s'est débarrassé de Pierre)

(75) Je vais tout envoyer promener.

(= je vais tout abandonner)

運動使役動詞は、知覚動詞のように、文融合による構文をとるかとならないかで、はっきりした意味の分化がみられるわけではないことや、“a NP”が位格と混同されやすいことなどが、(Ⅲ)の構文が使われにくい理由なのかもしれないが、このことに関してはさらに検討を必要としている。

[参考文献]

Gross, M. (1968) : *Grammaire transformationnelle du français : syntaxe du verbe*, Paris, Larousse.

Lamiroy, B. (1983) : *Les verbes de mouvement en français et en espagnol*, Amsterdam, Benjamin.

Le Goffic, P. & McBride, N.-C. (1975) : *Les constructions fondamentales du français*, Paris, Larousse.

Melis, L. (1983) : *〈The construction of the infinitive with causative movement verbs in French〉* in Tasmowski & Willems (eds.), *Problems in Syntax*, New York, Plenum, pp. 181-193.

Réquédât, F. (1980) : *Les constructions verbales avec l'infinitif*, Paris, Hachette.

Sandfeld, K. (1965) : *Syntaxe du français contemporain, L'infinitif*, Genève, Droz.

小川定義 (1988) : 「運動動詞＋不定詞構文と動詞句構造」, 『フランス語学研究』第22号, pp. 57-68.

木内良行 (1987) : 「使役構文について(二)」, 『ガリア』第27号, pp. 29-37, 大阪大学フランス語フランス文学会.

木内良行 (1988) : 「フランス語の使役構文について — 他の不定詞構文との関連から —」, 『待兼山論叢』22号, pp. 41-54, 大阪大学文学部.